

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 近藤 康裕  
論文題目 A Genealogy of Reading: Critical Consciousness in D. H. Lawrence,  
Raymond Williams, Doris Lessing, and John Fowles  
論文審査委員 井上 義夫、中井 亜佐子、中山 徹

### 1. 本論文の内容と構成

Introduction

Chapter 1—Evaluation, Continuity, Repetition: From D. H. Lawrence to the New Left

1. The Critique of Value and Evaluation
2. Continuity and Repetition
3. Lawrence's Metaphysic and the New Left

Chapter 2—Lawrence's Metaphysic in "The Prussian Officer" and *The Plumed Serpent*

1. Deconstructing Life and Death in "The Prussian Officer"
2. The Reversal of Instincts in *The Plumed Serpent*
3. Violence and Its Cure: An Ethical Problem
4. Blood, Drive or Lawrence's Metaphysic

Chapter 3—Lawrentian Themes in John Fowles's *Daniel Martin*

1. The Problem of Representation and History
2. Knowing and the Symbolic
3. Lawrence, Fowles, Williams

Chapter 4—The Critique of Reading and Criticism in Raymond Williams's Earlier Works

1. F. R. Leavis and the Times of *Scrutiny*
2. Reading and Criticism
3. Towards Textual Politics

Chapter 5—Reading, Writing, and Feeling in Doris Lessing's *The Golden Notebook*

1. Fragmentation, Wholeness or the Aporia of the Text
2. "Acts-Events" of Reading and Writing
3. The Small Personal Voice
4. Form, "Feel," and the "Structure of Feeling"

Chapter 6—What Are the Ghosts? : Allegories of Reading and Writing in *Daniel Martin*

1. A Theoretical Outline of the Ethics of the Novel
2. Ghosts as Indefinable Tropes
3. Totality and Language

#### 4. Allegories of Reading and Writing

##### Conclusion

## 2. 本論文の概要

「読むことの系譜学」と題された本博士学位請求論文は、1910年前後から1930年までに作品を書いたイギリスの作家D・H・ロレンスにおける批評意識の検討を出発点に、副題にあげられている20世紀後半に活躍した作家、批評家の批評意識がいかに関連し、その繋がりがまた同時代の文学的、思想的言説とどのような関係を有しているかを、間テクスト性と「読むこと」の観点から明らかにしたものである。

第1章では、“evaluation” “continuity” “repetition” というキーワードに焦点があてられ、20世紀後半においてロレンス再評価の中心を担ったニューレフトの作家、批評家たちが、ロレンスのどのような点を評価していたのかが明らかにされる。文学や文化が時代の変容に反応し、自らもまた変容していくとき、問題となるのは価値の変容とその評価、すなわち価値判断であり、ここに批評意識がかかわる。こうした「価値」に対する批評意識が“evaluation” というキーワードから議論されるが、ロレンスの小説にみられる産業資本主義近代に対する批判がそのような意味における批評意識に根差したものであり、これによって世代間の断絶や近代における分離のイデオロギーに対する根本的な批判が可能になっていると説く。章の後半では、ロレンスの批判の先見性を評価したニューレフトの作家、批評家たちとロレンスとの関係が“continuity” と“repetition” というキーワードで捉えられ、文学作品の創作や批評という言語行為を通して近代がかかえる問題と時代の変容に向きあった作家、批評家の一つの系譜が導き出されるという、本論文全体の謂わば骨格となる議論がなされている。

第2章は、第1章で論じられた後の世代へのロレンスの影響力の核にあるとされている“metaphysic” を、ロレンスの短編小説“The Prussian Officer” と、「指導者小説」と呼ばれ問題作と看做されることの多い*The Plumed Serpent* の読解を通して分析している。ロレンスの作品のなかでもこれら二作はとりわけ抽象性の高い構成原理に基づいて書かれているが、前者のそれは「生」と「死」の二元論の脱構築と呼ぶべきものであり、これがほぼ同時代にジークムント・フロイトによって提示された快原理を脱構築してしまう攻撃欲動の議論と同様の洞察を共有する間テクスト性を有しており、エロス/タナトスとその脱構築であるフロイトの欲動論と繋がるものであると論じられる。“The Prussian Officer” が、「生」と「死」を象徴する二人の人物の関係を暴力を通して描き出しているように、フロイトの生の欲動と死の欲動についての洞察の背景には、第一次世界大戦というかたちで噴出した暴力の問題があったが、ロレンスの作品にみられる“metaphysic” は、同時代に暴力を論じたもう一つの重要なテキストであるヴァルター・ベンヤミンの「暴力批判論」とも間テクスト的な関係をもつと指摘される。これを踏まえ、「血」をめぐる思想などにファシズムとの親和性があると批判されてきた*The Plumed Serpent* における暴力の噴出の描写も、人間性の神話を根本から再考に附するような欲動をめぐる洞察に基づいた小説の構成原理によるものであり、ロレンスの“metaphysic” は時代の現実の問題に直面した作家の批評意識の実践の形式だと論じられている。

第3章は、ジョン・ファウルズの小説 *Daniel Martin* にみられるロレンスやその作品への言及を分析し、両者の間には単なる影響関係をこえた関係性が見出されると論じる。ファウルズが評価したロレンスの先見性の現われは“representation”の批判にあり、歴史性をめぐる批評意識にあるとされる。ファウルズと同世代の主人公が直面する問題は、歴史的現実を隠蔽してしまうような表象のあり方に根差しており、この意味での「表象」＝“representation”が孕む問題と政治的な代表制度という意味における“representation”の問題とが重なりあうことに批評意識を向けたロレンスの先見性をファウルズは高く評価し、ロレンスの主題を書き込むことを通して彼自身の同時代に対する批判を展開しえた。この批判は同時に表象についての批判でもあるから、その批判はメタフィクショナルな小説の構成の基底をなしているのだとも論じられ、この小説の“feeling”への着目が、ロレンスを高く評価したファウルズの同時代人ウィリアムズの“structure of feeling”とも繋がるのが指摘される。

第4章では、ウィリアムズが最初に上梓した単行本である *Reading and Criticism* の詳細な分析を通して、ウィリアムズがのちに代表作 *Culture and Society* と *The Long Revolution* で展開することになる文化と社会の関係についての議論の根柢には、イギリスの実践批評の伝統を批判的に継承した精読の方法論があり、とくにF・R・リーヴィスとT・S・エリオットの文学批評と文化論に対する批判があったと述べられる。実践的な「読み」に焦点をあてたウィリアムズの議論が、上記の代表作における画期的な文化論やのちの文化唯物論の土台となったのは、読むという行為が読者自身の文化的、歴史的、社会的関係をテキストが体現している諸関係の網の目と交叉させる行為だからである。ここにウィリアムズの文化と民主主義への洞察を見出すことによって、“Culture is Ordinary”というテーゼで表される文化の生成の根本が「読み」と「批評」の実践のうちに考察されているのだと論じられている。

第5章では、ニューレフトの主要な人物でもあったドリス・レスリングの小説 *The Golden Notebook* をそのメタフィクショナルな分析から読解しつつ、それが同時代的にウィリアムズの文学論、文化論とも密接に関係しあう間テクスト性を有していることが明らかにされる。断片化したノートを書きながら言語の本質に対峙して新たな作品を書こうとする作家を主人公に据えたこの小説の形式は、パフォーマンスにその小説自体が作られる過程を体現しており、また同時に「読むこと」と「書くこと」によって変容されるイデオロギーを描き出すものでもあることが指摘され、レスリングが「同時代の“ideological feel”」を書くことを目指したと述べていることの意味が検討される。主人公の個人的な行為である「書くこと」が同時に general かつ collective になるような言語行為のあり方の追求は、ウィリアムズの小説論とも通底しており、ニューレフトがその文化論や社会論の基軸にした問題系とも直結するから、このすぐれてメタフィクショナルな小説の生成は、レスリングの言語についての批評意識が同時代の文化と社会の交渉のダイナミズムを捉えるさまを体現していると説かれる。

第6章では、ふたたび *Daniel Martin* がとりあげられ、本論文を通して問題にされてきた「読むこと」と「書くこと」への批評意識が、どのように20世紀後半のメタフィクションという形式と関係しているかという観点から、メタフィクショナルな実践に所謂「言語論的転回」以降の言語に対する批評意識の実践形式を見出すことができるとの議論がなされる。この小説において

も主人公は小説を書こうとしている人物であり、登場人物を言語そのものをめぐる問題に直面させることによって、シニフィアンとシニフィエの結びつきの恣意性や表象の不可能性を前提としたときの「読むこと」と「書くこと」に伴う倫理を前景化していると指摘される。この小説の中心的な形象である「幽霊」は、そうした不可能性にもかかわらず読まなければならないという、言語行為に取り憑く倫理的な“imperative”のアレゴリーであることが、ポール・ド・マンやヒリス・ミラー、アンドリュー・ギブスン、デレク・アトリッジらの議論を踏まえて論じられている。

結論では、ロレンス以降の世代の作家、批評家たちが、関係性をめぐるロレンスの批評意識が表象批判を可能にしたことを高く評価し、資本主義近代社会の問題とその変容を経験するなかで、ロレンスと問題認識を共有しつつ、言語とそれを媒介にした「読むこと」と「書くこと」についての根本的な批判を言語的な実践において具体化したことが指摘されている。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文は、モダニズム、ニューレフト、ポストモダンという通常の文学史では異なる時代区分に属する作家・批評家のあいだの関係性を「系譜学」という手法によって追究した、非常に大胆かつ野心的な論文である。時代区分を厳密に行い同時代の横のつながりを重視する昨今の歴史主義的な研究の動向に背を向け、反時代的な手法を意識的に採択することによって時代間のつながりを見出し、概念的にも新しい文学史を構築しようとする研究として、そのオリジナリティは高く評価できる。

特に第2章で、ロレンスの短編小説“The Prussian Officer”と、「指導者小説」と呼び慣らわされてファシズムへの傾きが指摘されることの多かった *The Plumed Serpent* が、筆者の新しい問題意識から読み解かれ、従来の通説とは異なった質をもつ作品として現われたことの意義は大きい。また第4章で、20世紀中葉のイギリスを代表するF・R・リーヴィスとT・S・エリオットの文学批評と文化論の限界が、レイモンド・ウィリアムズとの比較によって浮き彫りにされたこと、ニューレフトの思想における「文学」の位置付けが確認されたことも、本論文の成果と言いうる。

総じて、言語と社会と文化のあいだの関係とは何か、批評＝評価の条件とは何かといったスケールの大きな問題を、様々な理論的言説を参照しながら論じる理論的構築力、個々の文学作品解釈で発揮される分析力、これら二つの手続きを接続する構成力という点において、研究者としての高い資質を感じさせる論文である。また筆者の英語は非常に流暢かつ正確であり、緻密な議論展開の上で言語的にも何ら支障を来たしていない点は特筆に価する。

問題点として第一に指摘しうることは、本論文は異なるテキスト、批評系統、時代のあいだの「関係」を強調しているが、例えばニューレフトと脱構築系倫理批評の関係性を指摘することが、果たしてニューレフトを評価していることになるのかどうか、倫理の問題を「紙の上の戯れ」に帰してしまうように見える一部の倫理批評とニューレフトがつながりうるということは、むしろニューレフトの潜在的な保守性を指摘しているのではないかという疑問を誘発させるということである。

第二に、レッシングが本論で云う「系譜」に含まれていることは非常に重要であるが、彼女の

フェミニズムについて何ら考察が加えられていないのは大きな欠落と言わねばならない。彼女は1950年代においては、年齢も30に近い女性であったにも関わらず、*Angry Young Men*の一員と見なされており、*The Golden Notebook*でも「左翼知識人であることと女性であることの矛盾」というテーマが前景化されている。共産党からの離脱と社会主義リアリズムからメタフィクションへの「転向」も、彼女のフェミニズム思想そのものの変化と密接に関わっていると考えられる。

第三に、ニューレフトとメタフィクションを接続するという意味でもっともオリジナリティあふれる第4章の議論と第6章の議論が齟齬をきたしているように読まれてしまうことであり、誤解を招かない書き方、用語法を採用すべきであったと思える。

第四に、例えば第2章でレオ・ベルサーニとジョアン・コプチェクが引用されるどころなど、互いに相容れないはずの理論的言説を何の説明もなしにモザイク状につなげてしまう部分がある。

#### 4. 結論

しかしながら、これらの問題点、改善を要する点は、本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。以上のことから審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であり、当該分野の研究に十分に寄与したと認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与するのが適当であると考える。

## 最終試験結果報告

2010年2月10日

受験者            近藤 康裕  
最終試験委員    井上 義夫、中井 亜佐子、中山 徹

2010年1月28日、学位請求論文提出者、近藤康裕氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文 *A Genealogy of Reading: Critical Consciousness in D. H. Lawrence, Raymond Williams, Doris Lessing, and John Fowles* に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、近藤康裕氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、近藤康裕氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。